

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 10 日現在

機関番号：62618

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2012

課題番号：23720279

 研究課題名（和文） 第二言語習得理論に基づく日本語指導法の実証的研究
 -インプット重視の処理指導の実践

研究課題名（英文） Empirical Research on Processing Instruction in Japanese

研究代表者

中上 亜樹（ NAKAUE AKI ）

 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・日本語教育研究・情報センター・
 プロジェクト特別研究員

研究者番号：90581322

研究成果の概要（和文）：本研究は、より効果的な日本語指導の方法について探るために、第二言語習得研究の成果を基に考えられ、インプット理解（聞く／読む）活動を中心に授業を行う「処理指導」という指導の効果に関して、具体的にどのような言語項目において、効果が期待できるのかという点を検証するために、調査を行った。その結果、具体的な文法項目としては、「使役」「受身」「授受表現」で処理指導の効果が期待できること、その他に、授業の練習で使用する例文の文中の名詞の配置も効果的な指導の重要な要素となる可能性が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This research conduct investigation in order to explore about more effective linguistic features for a input-based teaching method called “Processing Instruction” that is based on the theories and results of second language acquisition research.

The results indicated that it has possibility of the effectiveness of instruction on “causative construction” “passive construction” and “giving-receiving verbs”.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：処理指導、インプット処理、効果的な日本語指導

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究の学術的背景

学習者の第二言語習得過程は、「インプット→インテイク→発達システム→アウトプット」という順で行われており、「インプット」を処理して意味理解を行い「インテイク」する際に、学習者はその処理をより効率的に行うためにインプット処理のストラテジーを持っているといわれている。

ところが、そのストラテジーを使用することによって誤った意味理解を行い、それが効

率的な習得を遅らせる場合があることが指摘されている（VanPatten 2004）。処理指導とは、そのようなストラテジーの使用により、誤って理解してしまう文法項目を取り上げ、その文法項目に注意を向けるように工夫をしたインプットをたくさん与えることで、正しく処理する練習を繰り返しさせるインプット重視の指導である。つまり、学習者の習得過程は一方向に進むことから、「インプットからアウトプットへと進む習得過程において、学習者の発達システムに直接的に働き

かけることで習得を促進させる指導」(VanPatten 2004)であると言われている。

一方で、従来の日本語教育では、文型を導入してすぐに口頭練習をさせることが多く、アウトプット重視の指導が行われている。このような理解やインテイクが伴わない指導は、発達システムに直接的には関与していない点が問題だと考えられる。

申請者自身、中上(2009, 2010)において、日本語教育においても処理指導が従来の指導よりも効果があること、そして、効果が見られる文法項目であっても、その特徴によって効果の高さに違いがあることを明らかにしてきた。しかし、先行研究において、処理指導の検証はイタリア語・英語・スペイン語・フランス語・など多くは印欧語において行われており、日本語ではまだ数が少ない(Lee & Benati 2007, Fukuda 2009)。更に、印欧語異なる特徴を持つ日本語において、学習者がどのようなインプット処理戦略を使用しているのかについて調べた先行研究はなく、処理指導の効果の検証を行う前に、戦略の使用について、明らかにしていく必要がある。

(2) 本研究の意義

本研究は、研究の成果を教育現場に生かすその効果を検証するという点が特徴としてあげられる。教育現場では、「研究と実践は違う」という言葉を教師の口から聞くことがあるが、本研究で使用する教材を応用可能な形で公開することによって、研究の成果を教育現場へと生かすための例となり得るのではないかと考える。

また、本研究は、日本語教育現場と第二言語習得研究に対して、次の2点においてそれぞれ貢献できると考えている。

- ①口頭練習中心の指導を根本的に見直し、インプット重視の指導の効果を検証することによって、第二言語習得理論を具体的に日本語教育現場の実践につなげる研究になる
- ②現在も第二言語習得研究の分野で、様々な言語を対象に処理指導の効果について検証が続けられていることから、日本語を対象に処理指導の効果を検証した数少ない研究の1つとなる

2. 研究の目的

中上(2009)において、処理指導に効果がある項目であっても、項目間で効果の高さに違いがみられることを明らかにした。この違いは、文法項目の持つ特徴によって出てくる可能性が考えられる。今後、日本語教育現場で処理指導を行うためには、どのような特徴をもった文法項目の場合に高い指導の効果

が期待できるのかを明らかにしておく必要があると考えられる。

そこで、本研究では、学習者の持つインプット処理戦略の使用により、誤った意味理解を引き起こしてしまう文法項目を明らかにすることを目的とし、調査を行った。

3. 研究の方法

(1) インプット処理の戦略

本研究で扱ったインプット処理戦略は、「最初の名詞原理」と「意味優先原理」であった。

「最初の名詞原理」は、文の最初の名詞を動作主だと処理する戦略で、この戦略を使用して、インプット理解を行うと、「AはBに殴られた」という文で「Aが殴った」と誤って理解してしまう可能性がある。

「意味優先原理」は、文の格関係よりも、現実世界で実現可能性が高い意味に処理する戦略で、この戦略を使用して、インプット理解を行うと、「子どもはお母さんに料理を作ってあげました」という文では、「お母さんが料理を作った」と誤って理解してしまう可能性がある。

(2) 調査

①調査の概要

調査は2×4の2要因配置の実験計画で行った。第1の要因は被験者間で、日本語能力(日本語能力下位群、日本語能力上位群)であった。第2の要因は被験者内で、文の種類(戦略使用で正しい理解ができない文、戦略使用で正しい理解ができる文)であった。なお、分析の際に用いた検定は全て有意水準5%で行った。

②日本語能力の測定

本調査では、日本語能力の違いによる戦略使用の影響をみたかったため、日本語のテストにより、日本語能力下位群と日本語能力上位群に分けた。

日本語のテストは、SPOT(Simple Performance-Oriented Test)を使用した。SPOTとは、1990年に筑波大学留学生センターで開発された、自然な速度の音声テープを聞きながら、解答用紙に書かれた同じ文を目で追っていき、文中の()に聞こえた音(ひらがな1字)を書き込ませるテストで、全部で60問ある。

③日本語学習者

調査に参加した日本語学習者は、日本国内の大学に在籍する日本語学習者36名で、国籍は、中国、韓国、ベトナムであった。SPOTと理解度テストの結果、日本語のレベルが著しく低いと考えられる学習者1名を除外した

ため、分析対象となったのはそのうち 35 名である。

更に、35 名の SPOT テストの結果から、下位群 17 名と上位群 18 名に分けた。対応のない t 検定で、両群のテストの点数を比較した結果、0.1%水準で有意差が認められたことから、($t(33)=8.348, p<.001$)。両群の間には、レベル差があると言える。

④材料

本調査で対象としたインプット処理ストラテジーは、「最初の名詞原理」と「意味優先原理」であった。

どちらのストラテジーも、24 文あり、そのうち、12 文がストラテジーを使用すると正しい理解ができる文（以下、スト正文とする）、残り 12 文がストラテジーを使用すると正しい理解ができなくなる文（以下、スト誤文とする）であった。

「最初の名詞原理」で使用したスト誤文は、「A さんは B さんに買い物を頼まれました」「A さんは B さんに部屋を掃除させました」のような受身、使役文、スト正文は、受身、使役を使用しない文であった。

「意味優先原理」で使用したスト誤文は、「子どもはお母さんに料理を作ってあげました」「先生は学生に分からないことを質問しました」のような、方向性を持つ動詞を使用した文で、現実世界で実現可能性が低い意味になるような名詞の順序にした文、そして、スト正文は、その逆で、現実世界で実現可能性が高い意味になるような名詞の順序にした文であった。

ターゲットとした、それぞれのストラテジーの文以外に、72 文をフィラーとして混ぜ、yes 反応と no 反応の数が同数になるように提示した。

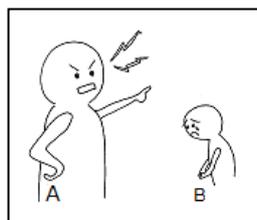
⑤方法

調査は、実験ソフト SuperLab4.5 を使用して個別に行った。具体的な手順を、以下に示す。

[調査の手順]

音声：A さんは B さんにしかられました

絵の提示



音声と絵の文の意味が同じか違うかを判断

まず、音声を 1 回流し、終了直後にパソコンの画面上に、絵を提示した。音声で聞かせた文の意味が、絵と同じか違うかをキーボードを押すことで反応させた。できるだけ早く反応するように学習者に教示を行ったが、反応できなかった場合は、8 秒で次の問題へ自動的に進むように設定を行った。

⑥分析

反応の正誤とともに、反応時間も記録してあるが、今回は、反応の正誤のみで分析を行った。

正誤判断成績に関しては、次の基準で採点した。yes 反応の文に対して、yes と回答した場合、および no 反応の文に対して no と回答した場合に 1 点を与えた。一方、判断を誤った場合や、制限時間内に回答できなかったものには 0 点を与えた。分析の際には、得点率で行った。

4. 研究成果

(1)「最初の名詞原理」の結果

日本語学習者は、聞こえてくる文の意味を理解する際に、「最初の名詞原理」を使用することで、正しい理解を妨げられているのかどうか、また、それは日本語能力によって違いがみられるのかどうかを明らかにするために、分析を行った。

まず、日本語能力下位群と上位群それぞれの正誤判断の成績を、ストラテジー使用で正しい理解ができる文、ストラテジー使用で正しい理解ができなくなる文とで比較すると、図 1 のようになる。

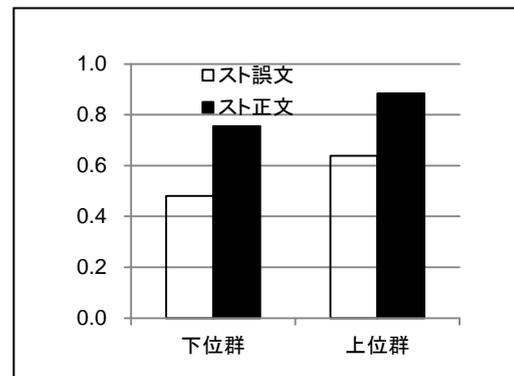


図 1 日本語能力ごとの得点率 (最初の名詞原理)

次に、2 (日本語能力：下位群、上位群) × 2 (文の種類：ストラテジー使用で正しい理解ができない文、ストラテジー使用で正しい理解ができる文) の 2 要因分散分析を行った。その結果、日本語能力の主効果が有意であった ($F(1, 33)=8.78, p<.001$)。下位群と上位群との得点差が統計上有意であることが明らかになった。また、文の種類的主効果

も有意であった ($F(1, 33)=35.94, p<.001$) ことから、文の種類によって、正誤判断の成績に有意差があることが明らかになった。図1から、ストラテジー使用で正しい理解ができなくなる文の正誤判断が、日本語能力下位群も上位群も有意に得点が低いことが分かる。

このことから、日本語能力に関係なく、「最初の名詞原理」を使用することで正しい理解ができなくなるような文においては、有意に成績が下がってしまうことが明らかになった。

日本語能力×文の種類の交互作用はなかった ($F(1, 33)=0.11, n.s.$)。

(2) 「意味優先原理」の結果

日本語学習者は、聞こえてくる文の意味を理解する際に、「意味優先原理」を使用することで、正しい理解を妨げられているのかどうか、また、それは日本語能力によって違いがみられるのかどうかを明らかにするために、分析を行った。

まず、日本語能力下位群と上位群それぞれの正誤判断の成績を、ストラテジー使用で正しい理解ができる文、ストラテジー使用で正しい理解ができなくなる文とで比較すると、図2のようになる。

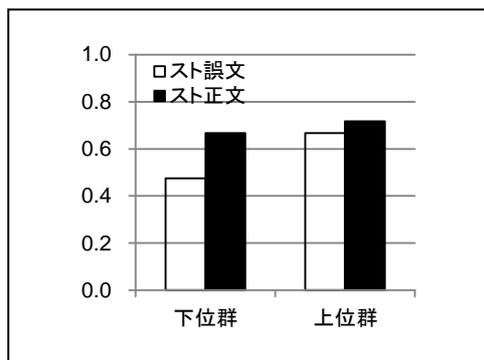


図2 日本語能力ごとの得点率 (意味優先原理)

次に、2 (日本語能力：下位群、上位群) × 2 (文の種類：ストラテジー使用で正しい理解ができない文、ストラテジー使用で正しい理解ができる文) の2要因分散分析を行った。その結果、日本語能力の主効果が有意であった ($F(1, 33)=11.39, p<.001$)。下位群と上位群との得点差が統計上有意であることが明らかになった。また、文の種類的主効果も有意であった ($F(1, 33)=17.68, p<.001$) ことから、文の種類によって、正誤判断の成績に有意差があることが明らかになった。

日本語能力×文の種類の交互作用に有意差がみられた ($F(1, 33)=5.92, p<.05$) ため、単純主効果の検定を行った。その結果、下位

群では、文の種類で正誤判断の成績に有意差がみられること、下位群と上位群で、ストラテジー使用で正しい理解ができなくなる文の正誤判断の成績に有意差がみられることが分かった。つまり、日本語能力下位群では、「意味優先原理」を使用することで正しい理解ができなくなるような文においては、正しく文を理解することが難しいが、日本語能力上位群では、文の種類に関わらず、正しく判断できていることが分かった。

(3) 結果のまとめ

2つのインプット処理ストラテジーに関する調査から、以下の点が明らかになった。

- ①日本語学習においても、学習者は聞こえてくる文の意味理解に、インプット処理ストラテジーを使用している
- ②「最初の名詞原理」では、日本語能力に関係なく、ストラテジーの使用が、正しく文を理解するのを妨げている
- ③「意味優先原理」では、日本語能力が低い場合は、ストラテジーの使用が正しく文を理解するのを妨げているが、日本語能力が高くなると、ストラテジーの影響を受けず、正しく理解できるようになる

②と③の結果から、「意味優先原理」は日本語能力が低い場合に、助詞が聞き取れない、または、助詞の機能を瞬時に判断するのが難しいなどの理由で、聞き取りやすい内容語を中心に文を聞き取り、現実世界で実現可能性が高い意味へと処理することで、効率的に文を処理していると考えられる。そして、日本語能力が上がると、機能語も聞き取れるようになることから、ストラテジーに頼らなくても文を処理できるようになるのであろう。日本語能力が低い学習者の場合は、授業で文が正しく理解できているようであっても、実際には機能語を聞き取り正しく理解できているわけではない可能性があるため、授業で扱う例文を工夫し、内容語の聞き取りだけでは正しく理解できないような文も取り入れる必要があるだろう。

「最初の名詞原理」は、日本語能力に関係なく、使用されることで、受身や使役のような文の意味を誤って理解してしまう原因になっている。この原理を使用せずに、文を理解することは、日本語能力が高くなっても困難な可能性があることから、処理指導で正しく文を処理させる練習を繰り返すことで、正しい理解へとつながる可能性が期待できる。

(4) 今後の課題

日本語学習者がインプット処理のストラテジーを使用しており、そのことが、正しい文の理解を妨げている可能性について明ら

かになった。今後は、先行研究で行われているように、これらの文法項目に関して、処理指導の効果を測る必要があると思われる。

また、今後、処理指導を実際の授業うことができるように指導手順を確立する必要がある。つまり、現在、先行研究で行われている処理指導は、理解練習のみで、アウトプットの練習を一切行わない。実際の授業で、アウトプットの練習を行わない授業というのは非現実的である。より効果が高い授業を行うためには、文法説明の後に処理指導を行い、アウトプット練習を行ったほうがよいのか、それとも、アウトプット練習を行い、最後に処理指導を行ったほうがよいのか、といった点について検証していかなければ、教室で使えるようにはならないであろう。今後はこの点について、調査を行っていきたいと考えている。

【引用文献】

- Fukuda, M. (2009) The effect of processing instruction and meaning-based output instruction on the acquisition of Japanese honorific expressions. Unpublished doctoral dissertation, Purdue University, West Lafayette, Indiana.
- Lee, J., & Benati, A. (2007). The effects of structured input activities on the acquisition of two Japanese linguistic features. In Lee, J. and Benati, A (Eds.), Delivering processing instruction in classrooms and in virtual contexts: Research and practice (pp.49-71). London: Equinox.
- VanPatten, B. (2004). Input processing in second language acquisition. In B. VanPatten(Ed.), Processing instruction: Theory, research, and commentary (pp.5-31). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- 中上亜樹(2009)「処理指導 (Processing Instruction) の効果に関する研究－日本語の使役と謙譲表現の項目間の比較－」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第58号, pp. 245-252, 広島大学大学院.
- 中上亜樹(2010)「Processing Instruction (処理指導) の効果に関する研究－日本語の形容詞比較の指導をとおして－」『教育学研究ジャーナル』第6号, pp. 41-50, 中四国教育学会.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ①中上亜樹「理解中心の指導法「処理指導」と産出中心の指導との比較研究－形容詞の比較の指導を通して－」『日本語教育』第151号, 日本語教育学会, 2012年, pp. 48-62.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中上 亜樹 (NAKAUE AKI)

大学共同利用機関法人人間文化研究機構
国立国語研究所・日本語教育研究・情報センター・プロジェクト特別研究員

研究者番号：90581322